

四天王寺女短大 大川原千鶴

1. 浮世絵に現われた被服について研究発表を重ねてきたが前回にひきつづき「かぶりものと履物」について発表する。

2. 浮世絵の中に描かれている「かぶりもの・履物」がいかなる時代背景の下に世に出たか画材を通して考察した。

3. 浮世絵に現われた主な画材は歌舞伎と遊里であるが、かぶりものや履物もまたこれらが流行の源となっている。面体をすっぽり覆う袖頭巾は品川通いの遊客の間から流行をみたものであるが編笠もこれと同様な目的で広く用いられた。遊廓の大門口の外に軒をつらねたお茶屋では、ここで一休みして揚屋にむかう客に店の目印の焼印を押した編笠を貸していたということで一名焼印の編笠とよばれた。また女性の用いた笠も目かくしと日除けが目的で口元を紙でかくして用いたものであったが手拭が世にでてからは笠に手拭は必須のものとなつて、笠下に用いたり頬を包んだりした。また堺の商人が帰朝みやげに秀吉に献上した紙張りの日傘は模倣されて流行した。これは編笠・菅笠類が結髪を乱すのに比べ日傘としても雨傘としても好まれた理由の一つである。長柄の傘は現代まで引きつづき寺院で用いられているが当時は遊里でも上娼が用いていた。履物はこれまでは草履が主であったが貞享、元禄頃に種々の下駄が流行している。その原因の一つとして江戸市中に犬の糞多くこれを嫌ったためというのは、いかにも世相を物語るものといえよう。